

Progress

未来へはばたく在学生

東洋大学には学問・研究・スポーツ・ボランティアなど、多彩な領域で活躍する学生がたくさんいます。

今回は、日銀グランプリで提唱した「SDGsホテル」で奨励賞を受賞し、取り組みを通してSDGsへの意識が高まったというお二人にお話を伺いました。

法学部法律学科 4年
遠藤 唯萌さん (写真：左)

法学部企業法学科 4年
岡野 愛さん (写真：右)

北海道の地方創生案を提唱することを主な活動とする本学公認サークル「北海道研究会 ビリカ」に所属。「第16回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」にて、奨励賞を受賞。

※日銀グランプリ
日本銀行が主催。大学生を主な対象とした金融・経済分野の小論文およびプレゼンテーションによるコンテスト

学生のうちに“やり遂げた”と、感じられる活動を目指して。



遠藤さん：私たちは以前から公務員を志望していて、地方創生に興味を持っていました。大学1年のときに、現在サークルの顧問を務めていただいている秋場勝彦助教（法学部法律学科）の授業で、金融・経済分野のコンテストである日銀グランプリの存在を知り、在学中に何か「やり遂げた」という経験を得たいと、当時集まったメンバーで「北海道研究会 ビリカ」を立ち上げました。日銀グランプリへの応募を掲げ、北海道の歴史や文化、経済などを学び、対象地域を絞ってその地域が抱える課題に対し、解決策を考えています。活動の中で、北海道日本ハムファイターズがボールパークの建設を計画している北広島市に着目し、「SDGsホテル」と名付けた分散型ホテルへの投資・運用を日銀グランプリで提唱しました。

持続可能かつ多角的に、大学での学びを活かしたSDGs的発想。

岡野さん：SDGsホテルは「SDGs達成に取り組んでいるホテル」という意味ではありません。自律的に好循環できる地域のために、宿泊や飲食、浴場などの施設・設備を地域内に分散させ、地域一帯を宿泊施設として投資していくということです。現在、ホテルの投資は都市部に集中しており、観光資源はあるのに宿泊施設が足りないという北広島市のような地域は少なくありません。そうした地域で、同時に深刻な問題である空き家や学校跡地を活用し、地域全体を宿泊施設として利用する「分散型ホテル」がアイデアの中心になりました。また、分散型ホテルの実現に向けた投資を推進するために、地理情報システム（GIS）を活用した投資環境の「見える化」や、閑散期にはホテル以外の業態へ柔軟に変更できる法制度の活用など、経済や地学、法学といったさまざまな視点からアイデアを考える必要がありました。

遠藤さん：私たちの提唱は「SDG11：住み続けられるまちづくり」に最も近いものですが、ずっと住み続けられるまちになるには、経済成長や産業の基盤、つくる責任、パートナーシップなど他の目標の達成も考えることが必要であると気づきました。

この経験があったからこそ、進む道の見え方が変わった。

遠藤さん：もし来年から公務員として働けることになったら、今回の日銀グランプリで得た経験が大きな糧になると思います。地域の需要や課題が可視化できるGISを扱えることで、何が必要なのかという実態を理解し、より良い行政サービスを考えていきたいです。特に選挙権や行政の満足度調査などから排除されてしまう18歳未満の若者たちの支援に関心があり、今まで届きにくかった声を拾い上げられるような支援ができればと思っています。

岡野さん：私は行政の立場からSDGsの取り組みに関わっていきたくと思っています。「SDG17：パートナーシップで目標を達成しよう」のように、地域の方々にSDGsを伝えていく活動にも取り組みたいです。

遠藤さん：私たちが最初はSGDsに関して、聞いたことがある程度でした。多くの人が感じるように、内容を見ても自分には関係のないことと思っていたかもしれません。

岡野さん：調べていくうちに、国や自治体、企業・団体・教育機関、私たちのようなサークル、そして個人レベルと、より細かく具体的な目標が設定されているとわかりました。SDGsは「水を無駄にしない」そんな些細なことからも始められるものです。そして、「知ろう」とすること自体もSDGsに対する取り組みだと気づきました。SDGsをきっかけに新しい価値観と出会い、視野が広がることもあります。まずは関心を持つこと、知ることが大切だと感じています。



本法人安齋隆理事長への受賞報告（2021年3月）



顧問の秋場助教とフィールドワークで訪れた北海道・ボールパーク予定地にて（2019年9月）